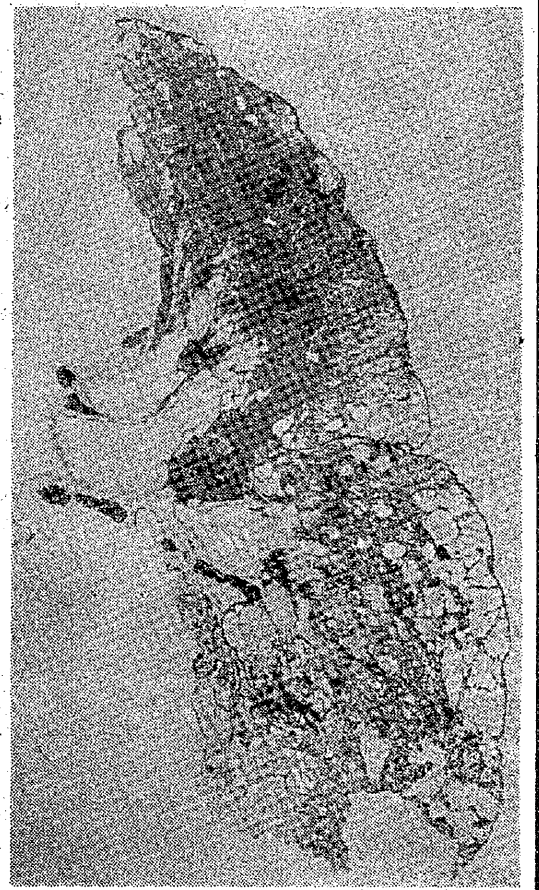


じん肺、多発するか



肺胞のレントゲン写真。恐るべき実態。

肺胞壁が破れてか らではもう遅い

写真は、炭鉱坑内労働二十年という人のじん肺。大量の石炭粉じんが肺の組織に侵入し、肺の組織を破壊し、肺の機能を失っている。恐るべき実態。

左側の部分に、広汎に黒化した部分があるが、これは粉じん性塊状である。

肺の組織が破壊され、肺の機能が失われている。恐るべき実態。

粉じん包む作業環境

警告し続ける職場新聞

本紙が毎号のように強調して警告しているように、いま炭鉱ではじん肺患者の危険性が日まに増加しており、坑内に働く者の口から「出てくれば、一人や二人のことではなかぞき」という言葉が聞かれる。恐ろしい状況である。いまだおかしなところがある。治る道のない病状だけに、緊急に対策を講じなければ、あとで後悔しても取り返しがつかぬ。労働者はもとより、命までも売ってはいけません。

坑底の職場にじん肺多発のおそれが出てきたことについて、職場風に乗り、大量に流れているフライアッシュ(石炭の燃えがらの粉)が、一日も早く防止対策を立てる必要のあることを指摘している。そのような新聞のなかに、あせ(三川指導部七分会新聞)、「交流」(宮浦指導部電気分會新聞)がある。次に、その記事の内容を紹介しよう。

「交流」の記事

現在発病しているじん肺患者の多くが、昭和三十年頃掘進作業に従事した人々だといふ。

じん肺の恐ろしさは、十年後、二十年後に発病し、体をむしばみ、寿命をちぎってしまうことだ。

岩に含まれている酸分だけが有害なものではない。じん肺患者は、製粉工場に、紡績工場に多く発生しているのだから。

現在宮浦四十五御関係(水面

「あせ」の記事

五月十八日の西日本新聞によると、高島炭鉱病院はAさん、Bさん、Cさん(肺病二(軽症度)の診断(会社申請)を下していたが、長崎労災病院・労働基準監督局の調べで管理四(重症度)・結核合併であることがわかった。

さるに「出勤不良」で肩たたきされ、解雇の道を歩まれ、それで「じん肺は心配ない。仕事してよい」といわれ、一方では「ソニアジト錠」(結核薬)が与えられていたことも判明。

柳田末一さん(56歳)も同じ経過をたどり、管理四が判明した。個人申請で、この結果が出たのである。

何を決意すべきなのか

解説

じん肺にかかると、労働災害・職業病の増加は重大問題となっているが、ではその原因はどこにあるのか。

第一に、高度経済成長政策のなかで、外国から導入した新しい技術などを中心に、独占資本があまりにも盲目的に生産手段の技術革新を強行する反面、危険防止・安全

創造性豊かな新聞を

活動めざし話し合い

六日熊本県労働会館で、久方ぶりに職場新聞連絡協議会が開かれ、県内各労組の職場新聞活動の現状と、今後の活動の方向について話し合いが行われた。

全などの投資を無視するか、極度に無視したこと。スピードアップ、作業量の増大、しめつけの強化がそれらとなって顕著になってきた。

第二に、独占資本が押しつける低賃金制度、悪化する労働条件が労働者をばたきし、労働にたいしては、外国から導入した新しい技術などを中心に、独占資本があまりにも盲目的に生産手段の技術革新を強行する反面、危険防止・安全

群馬の石井さんから便り

こんどC O・遺族を守る会事務局に、群馬県渋川市行幸田七の三にお住まいの石井重信さんから、第五回自治労まなぶ読者全国交流集報告書が送られてきました。

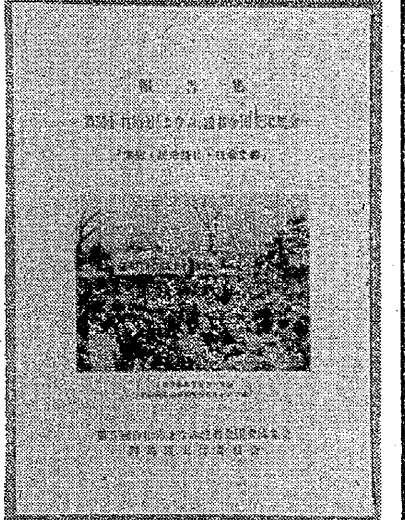
火花

私は、三池の集いに参加したなかで、C O患者を守る会に入会しなから、その後の取り組みがなされていく実態を話しました。府連協は今後の組織拡大とともに、C O患者を守る会の組織化に重点をおいて、秋の三池にまなぶ集いまでには何らの具体策を立て、三池にもって行くように取り組むことになりました。

「旅から帰り、C O患者を守る会への入会者を、いろいろの所で呼びかけているのですが、なかなか思うようにはいきません。皆、苦しい苦しいとをいっています。でもなんとか、群馬にも会員が増える条件があるので頑張っています。

お送りした入会者は、第五回自治労まなぶ読者大会の時、一人ですが会員になってもらいました。よろしく願います。

三池労組結成三十周年記念集が大成功だった様子を社会新報で見て、よかったなあと感じています。三池の火がもっと大きく、強



寄せられた報告集

